

## 「デカルトの夢, ワーズワスの夢

——本と石と貝殻をめぐる——」

井 上 美沙子

J. W. スマイザーは1956年の *PMLA* 誌上で、ワーズワスの『序曲』第五巻の中で語られている夢と、デカルト(1596—1650)の夢との関連性について論じている<sup>(1)</sup>。この指摘は卓見であったが、その主張は、人から語られた夢であったこと、その夢が本についてのものであったことを根拠とし、デカルトの第三の夢にだけ関連づけたにとどめたものであった。

ここでは、ワーズワスとデカルトとを繋ぐ糸の所在、デカルトが生きた時代性と彼の個人的な体験という外的要因をまず検討し、その後デカルトの三つの夢とワーズワスの夢との近似性をたどり、その類似点と相違点を明らかにしていきたい。それによりワーズワスの世界の内実へと至り、彼の思想の近代的側面が浮き彫りにされ、彼の夢の持つ「近代」に対する警告と予言とを読みとることができると思われる。

デカルトが近代哲学の祖と考えられていること、十八世紀フランス啓蒙思潮に及ぼした影響の大きさ等を思う時、フランス革命に共鳴したワーズワスがデカルトに関心を抱いたことは容易に察せられる。ましてデカルトの苦悩と心の成長が語られた『方法序説』((1637)；英訳 *A Discourse of a Method, for the Well-guiding of Reason, and the Discovery of Truth in the Sciences* (1649)) や、A. パイエ(1649—1706)の著書『デカルト伝』((1691)；英訳 *The Life of Monsieur Des Cartes* (1693)) を直接読んだか否かは不明であっても、少なくともその内容を知識として知っていた筈であろう。

十七世紀前半に生きたフランスの哲学者であるデカルトは、早くに母を失い、法律家の父と乳母に育てられ、将来は法律家か医者になり、その富と名誉とを手中にできるよう囑望されていた。彼の時代はまだ中世の夢から目醒め切らない混乱の世の中であった。例えば、ローマのガリレイがコペルニクスの地動説を採ったかどで捕えられたり、大学は真理探求の場ではなく、既成の理念を守る城塞と化し、新しい思想を取り締る所でさえあった。そんな中で、彼は当時一級であったラ・フレーシュ学院で学び、その後学位取得の為、大学へも進んだ程であった。彼は優秀な学生であったのに、いやむしろ皮肉にも、そうであったが為に、人生に役立つ明晰で確実な知識は学校で得られなかったことを自覚した。学校で教えられた「書物による学問」に失望したデカルトは、自己と世界という学問の原点に立ち戻り、新しい学問の基礎を掴み取ろうと決意して旅に出た<sup>(2)</sup>。父の期待に反逆し、名誉と富とを捨てて旅立ったデカルトの内心の不安や迷いは大きかった。自然界の真理を追求し、科学的世界像を求めてやまない己の心は、悪魔的なものに突き動かされているのではないか、神に背くものではないかという大きな不安であった。暗夜を一人で青春彷徨する中で見た、1619年の三つの夢は、彼の不安の種であった己の心に悪魔が住んでいるのではという疑念を拭う働きをし、彼に「ワレ、イカナル人生ノ道ヲ歩ムベキカ」という熾烈な心の叫びを彼に確信させたものとなった。

同じように詩人としての在り方をめぐり、暗中摸索をつづけていたワーズワスにとって、このデ

カルトの思想的転換点である夢事件は、強くワーズワスの心をとらえ、深く印象づけられたことと推察される。

A. バイエは『デカルト伝』の序文で、自分はデカルトを「聖者」に仕立てる意図はないと語っている。従ってデカルトに不利な事実を隠そうとはしなかった、と。これは正式の結婚によらず、デカルトがオランダ人ヘレナとの間に娘フランシースをもうけた事実を指している。この一件は、同様にフランス人アンネットとの間にもうけた娘キャロラインの存在をワーズワスに即座に想起させ、デカルトに親身な想いを寄せたことであろう。デカルトも、ワーズワスも、私生児をもうけたことによる罪の意識と悔恨の想いは激しく、その試練は両者の思想の深化を促したようだ。

このようにデカルトもワーズワスも、両者とも自分の生きる道を求め、一人は真理を探究する科学者として、一人は詩人として、苦悩に満ちた青春時代をすごしたのであった。そして何にもまして両者の緊密で秘かな引力ともなった事実は、共に私生児を持った心の痛みではなかったかと思われる。こうした外的要因による両者を繋ぐ糸を探ってきたが、次にデカルトの夢とワーズワスの夢そのものの検討をしてみたい。

はじめに、デカルトの三つの夢はどのようなものであったのであろう。第一の夢——彼が道を歩いていると、彼を脅やかす幻影がいくつか現われ、その圧力で左に体を傾けなければならない程であった。そんな時烈しい風が吹き荒れ、彼は渦巻きに巻き込まれ倒れそうになる。しかしなおも歩きつづけてゆく。行く手に学院が見えてきたので、救いを求めるように学院の教会堂へ祈りに行こうとする。またしても烈しい風が起り、教会堂の壁に押し付けられてしまう。——ここでデカルトは目を覚ます。彼はこれを彼を誘惑する悪霊の仕業ではないかと怖れた。先にも触れた、科学的世界像を求めるよう彼を促し、彼を不安がらせる悪霊の作用ではないかと、デカルトは思ったのであった。教会堂を真理の象徴と考えると、真理探究の道を歩み始めた自分を悪魔がとり込み、その知識を横しまな思いへとねじ曲げようとしているのだ、と。つまり、神と悪魔とで彼の魂の取り合いが始まり、それを神が警告したと解釈したのである。

デカルトより少し前の時代に、「魂の闘い」の指導書である『往生術』<sup>アリス・モリエンダイ</sup>はよく読まれていた。従って彼の魂をめぐる神と悪魔による綱引きの概念がデカルトの心の奥底に潜んでおり、それが夢となって表われたことは容易に察せられる。そしてそれを神による警鐘と彼は受けとめた。

第二の夢——雷鳴のような音に驚かされて跳び起きると、部屋の中に沢山の火花が降ってきた。——つまり、第一の夢をみて罪の悔悛をせまられた結果、悪霊が去り、真理の霊が彼の真理探究を祝福しに降りてきたのだと彼はこの夢をとらえた。

第三の夢——誰が置き去りにしたのか、机の上に二冊の本がある。一つは辞書で、もう一冊は詩華集であった。開かれたページには「ワレ、イカナル人生ノ道ヲ歩ムベキカ」という言葉が書かれていた。見知らぬ男が来て「在リ、シカシテ在ラズ」<sup>(3)</sup>という詩行を言うので、それをその詩華集の中に探すのが見当らない。先に開いてあった「ワレ………」の詩も再び読もうと探すのだがわからなくなってしまった。そのうちに、さっきまでいた見知らぬ男も本も消えてしまうのだった。——眠ったままの状態、デカルトはこの夢を解釈し始める。辞書は「総合された学問」、詩華集は「統合された学問と知恵」、「ワレ、イカナル人生ノ道ヲ歩ムベキカ」の言葉は、賢人の忠告、または道徳神学。「在リ、シカシテ在ラズ」は人間の認識と地上的学問の真と偽りを示すものと解釈していく。

前述のように、デカルトの時代、知識欲は罪の源泉である欲望の一つに考えられており、学問は信仰の敵として排除されていた。デカルト自身、己の自然探究に向かう力に悪魔の影を見、不安を



抱いて旅にあった時に見たこの一連の夢は、彼が神に祝福された事ではないかと悟る。つまり神が理性の正しき使用者として自分を認めてくれたものである、としてその夢をとらえた。神と己とを認識する際に、理性を正しく用いる自覚に立ち、真の学問の道を彼は選択した。こうして真理を探究していく決意を、あの三つの夢は彼にさせたのであった。

一方、ワーズワスの『序曲』第五巻で語られる夢は次のようだ。ある人が詩と幾何学的真理について考慮中眠ってしまう。夢の中、砂漠のような荒地が見える。一人の男が石を抱え、一方の手に輝く貝殻を握っている。彼の話によると、石はユークリッドの幾何学原本で、貝殻はもっと価値のある本だと言う。その貝殻を耳に当てると、明確な音声で間近に迫った大洪水により地上の子らに破局が訪れることを予言している。予言はどれも真実らしいのでこの石と貝殻（二冊の書物）の保存を願って自分はそれらを埋めに行くのだと説明する。男が先を急ぐのについていくと、後ろから一条のきらめく光が見える。男は荒涼たる砂漠を急ぎ、その後を洪水の水が追いかけていく。

このように『序曲』で語られたワーズワスの夢の中の石と貝殻は、デカルトの夢に表われた2冊の本と照応される。石は幾何学の本であるとワーズワスが詩の中で断じている所に、デカルトの影を、そしてデカルトの夢にあった知識の総体としての辞書を同時に想起させる。また貝殻は、はるか昔よりリラを意味しており、韻律のイメージを持つ。従って、デカルトの夢の中に表われた詩集がこの貝殻になぞられているように思われる。光の登場は二つの夢に共通しており、デカルトの嵐の中の情景は、ワーズワスの砂漠の中の設定に似て、人間の力を克えた自然に対する無力な人間の姿が顕わされている。

このようにデカルトの三つの夢と、ワーズワスの夢はピッタリと符合されているように思われる。しかし注意深く見てみると、ワーズワスの夢はデカルトの逆の順序に夢見られていることに気がつく。デカルトの場合は、嵐→光→本の順であり、ワーズワスの夢は、本→光→洪水という順になっている。順序が逆であることに注目してワーズワスの夢解釈をする時、彼の時代を見透す眼がそこに窺うことができる。

一切を疑う方法により、明晰な理性に信頼をおき、あらゆる知識を合理的思惟により導き出そうとしたデカルトは、まさに中世と近代を画する存在であった。デカルト以後ワーズワスに至る150年の間に、科学は急激な進歩を遂げ、時代は大転向をみた。そんな中で、ワーズワスは近代合理主義が推し進められた果ての破綻を夢見ており、その救済をも臍ろに感知しているようだ。つまり、デカルトが科学的世界像の追求を決意した最後の夢から始めるワーズワスの意図は、近代合理主義に傾きすぎることにより、人間の心が悪く溢れ出す大洪水を招くことの予言に存と考えられる。振り向いた時に見えた後方に輝く一条の光は、合理主義に走る人間を諫める光が降りてきたものであり、近くに迫り来る大洪水は、神の警告でもあると読み換えることができよう。

こうした読み直しは、デカルトの三つの夢を念頭に置き、対比する時に、初めて顕わにされるワーズワスの非常に近代的側面を浮び上らせている。ここで、ワーズワスの持つ詩的世界を見てみたい。そこにデカルトの夢——個人の思想的転機・近代の誕生のドラマ——を思想の中に導き入れ、しかもその夢を逆に見なければならぬ要因をつかんでこそ、この読み換えが生命を噴き出し、近々とわれわれに迫って見えてくる筈であるから。

『序曲』第五巻で述べられている事柄は、一般に解釈されているように本の大切さ、理性の尊さであるということは確かである。しかし注意深くその夢のくだりの前後を読んでいくと、時間という洪水にのまれることのない本に対する信望を主張している以上に、理性と本、そして人間とその本性についての対比や位置付けが心の奥底に強く根ざしていることが了承される。

.....Hitherto,  
In progress through this Verse, my mind hath look'd  
Upon the speaking face of earth and heaven  
As her prime Teacher, intercourse with man  
Establish'd by the sovereign Intellect,  
Who through that bodily Image hath diffus'd  
A soul divine which we participate,  
A deathless spirit, Thou also, Man, hast wrought,  
For commerce of thy nature with itself,  
Things worthy of unconquerable life ;  
And yet we feel, we cannot chuse but feel  
That these must perish.

.....  
.....Oh! why hath not the mind  
Some element to stamp her image on  
In nature somewhat nearer to her own ?  
Why, gifted with such powers to send abroad  
Her spirit, must it lodge in shrines so frail ?

(*Prelude*(1805—6), V, 10-21, 44-48.)

天地の語りかけとも言える大自然は最良の師であるが、それに近い書物というものを人間はつくり上げ、同じように不滅の生命を持たせることを表明している。しかし大自然の語りかけに呼応する人間の魂とその本性の偉大さは、それを書きとめ封じ込めている物としての書物の卑小さには比べようもない、とも述べている。このように書物やそれを著わす理性の重要性を認めてはいるが、それ以上に、自然と直かに触れ合い、己の心を育てられる人間の本性や心の広大さの方を、大きくワーズワスは位置づけていることが理解される。

こうした主張にとくに近似した内容を唱っているものに “Expostulation and Reply” という詩がある。この詩が創作された経緯をワーズワス自身次のように述べている。“The lines entitled “Expostulation and Reply”, and those which follow, arose out of conversation with a friend who was somewhat unreasonably attached to modern books of moral philosophy.” このように余りに過剰に啓蒙の書に傾倒している友人（ハズリット）との接触が、この詩を生ませたことを明らかにしている。全体としての人間性を無視して、理性的な一面のみを追求するいわゆる啓蒙の書をこの詩の中では非難し、自然を見つめ沈思するだけで心が育てられることの主張が、強く述べられている。

では何故、自然が人間の内面に呼びかけをし、働きかけることにより、その人に内在する力を発揚させるのであろうか。このメカニズムを、ワーズワスがどうとらえているかを考えてみたい。

ワーズワスが1799年に書いたと推定される *Mora! Fragment* の中に、このメカニズムを解く鍵がある。

Can it be imagined by any man who has deeply examined his own heart that an old habit will be foregone, or a new one formed, by a series of propositions, which,



presenting no image to the [? mind] can convey no feeling which has any connection with the supposed archetype or fountain of the proposition existing in human life ?<sup>(4)</sup> [イタリックス, 筆者]

心を深く内省する人間にあっては、心に何のイメージも喚起せず、内在している筈の〈archetype〉(原型)や、〈fountain〉(源泉)に関連する感情を一つも伝えない命題により、古い習慣を取り払い、新しい習慣を形づくることなど考えられるであろうか、という内容が述べられている。

もう少し解説を加えてみよう。人間は感覚を通して、光の波長や音の振動などにより外界の現象を把握することができる。しかしそれを認知したと同時にそのものがわれわれに、美しいとか、なつかしい等の気持ちを引き起こし感動させるのは、一体何故なのであろう。それは、記憶や精神のうちに埋もれているものが、感覚を通してとらえられたものにより触発され、姿を顕現した時に襲われる感情であるらしい。つまり心に内在する〈archetype〉や〈fountain〉が外界に見えた〈ectype〉に啓発され呼び醒まされ、意識の表面に浮び上るメカニズムによると考えられる。無意識の中に眠る深層の記憶が発揚され、人間に内在されている力を引き出し育てていく。こうした状況をワーズワスは、人間の〈habitual being〉として捉えていた。これは〈習慣的なもの〉としてワーズワスの詩学の基礎を築くものである<sup>(5)</sup>。ここではこれ以上の言及を避けるが、〈習慣論〉が彼の詩学に果たした役割を別の機会にくわしく論究したい。

ワーズワスは、コールリッジ同様に、己を求めてやまないエコーだの鏡だの、また fountain という言葉に愛着を抱いている。エコーにしても鏡にしても虚像を写し出すものである。この虚像の向う側にある実像という真を求める姿が、〈ectype〉を通して〈archetype〉を握み取れる心の操作を連想させるからだ。そして元来、心に備っているが為、涸れることなく湧き出てくる力の連想としての fountain という言葉もまた、確かにワーズワスやコールリッジの心に強く響いてくる言葉であったにちがいがなかった。

従って “To a Painter” という詩の中でもワーズワスは、絵画の芸術性は写実の力にあるのではない。描かれたものを突き抜けた奥にあるもの (ectype) が、見る側の心に潜む何か (archetype) を呼び醒まし、いかにそれをかきたてるかにあるとしている。この態度の中にも、今迄見てきた彼の論理が透けて見えている。

以上概略的に見てきたワーズワスの詩的世界は、書物の価値、理性の大切さを認識した上で、啓蒙主義のもつ欠点に対する相補的特性を持つと考えられる。

啓蒙主義が求めた幾何学的精神は、生全体を理性に従わせようとするあまり、全体を機械化してしまった欠点を生じさせた。また、その経験論は、デカルトの流れをくみ、余りに懐疑的でありすぎ、人間の知識を現象という感覚界に厳しく限定してしまった。従って科学的啓蒙主義に要約される一種の辺狭な思考に対する反動として、神を宇宙の内部に連れ戻し、自然や人間の本性の中にその意図を見い出そうとする傾向が生まれ、神の超越性よりはむしろ、内在性を強調する、ワーズワスのような詩的世界の展開がなされたものと考えられる。それはデカルトの時代以来、思想家達を苦しめてきた精神と自然、心と身体との二元論の問題を解決しようとする努力でもあると言える。

デカルトの時代以降は、現象を解明し、経験論的に分析をつづける理性と科学に重点が置かれ、時代は大きく変転を遂げた。こうした科学主義に偏り、科学的に説明できないものは切り落とし、存在しないものと考えそのままに推し進めてきた。そうして 150 年が経過したワーズワスの時代に、

その欠陥を見極めるには、そもそもの近代のはじめへと立ち戻り、その矛盾点を明らかにしてこそ、それを解決できよう。

デカルトの「ワレ思ウ、故ニワレ在リ」という「コギト」は、近代的思想のはじまりであった。このデカルトが暗夜を一人行く人のように、手探りする中でつかんだ、理性を正しく導き、諸学問において真理を探究する決意は、彼の三つの夢によりなされたものだった。この夢は彼の精神成長過程の中にあって重大で意味深い事件であった。ここからはじまった近代は、ダーウィンの種の起源や心理学等、さまざまな分野で科学的進歩を大きくとげた。時代が進む中で、デカルト自身が根本的に主張した、自己と世界という学問の原点は見えなくなり、科学主義、理性主義の弊害が見られるようになった。

ここで注意しなければならないことは、ワーズワスはその傾斜を悪いとして見ているわけではないという事柄である。これは必要な傾斜であり偏りであったと見なしている。ワーズワスをはじめとしたロマン主義者達は、科学の最新の発展を熱心に追いかけて、科学の夜の側面とも言える無意識の心理学や夢の象徴言語などに示唆を与え、大きな貢献をしてきた<sup>(6)</sup>。このことから、理性主義の動向を容認し、合わせてその破局をも見ている姿勢がうかがえる<sup>(7)</sup>。つまり聖書にある「放蕩息子」の説話に見られるものと同様のものをそこに見ている。先んじる離反があつてこそ、その後切り離れたものに立ち戻り、再結合した時には、前のままでは決して得ることができない大きな意味合いを持って再生されるという、一つの再生のパターンをそこに見ている態度である。ワーズワスは、理性をつきつめてきた後に生じる破壊から再生する方法として、理性が離反していった直感への揺り戻りの必然性を、彼の詩学の世界の中に導き、近代思想を画したデカルトの夢を逆から見る必要性と、その意義とを合わせて臆ろに感知していた。このことが、ワーズワスの夢の内容となって現われたと考えられる。

デカルトの『方法序説』の書き出しの宣言は、「良識はこの世で最も平等に分配されたものである」という、理性は一般の人にも皆同じように授けられていることを述べたものである<sup>(8)</sup>。また、ワーズワスの『序曲』の書き出しは、大自然は自ら備え持つ力を意識しており、人間の心もそれを写し出し、天与の力が塵の中から発揚され、静かな心が授かることの喜びの確信から始められている。これは自然や事物が〈ectype〉を提出し、人間の心に働きかけ、心に深く沈澱していた〈archetype〉を啓発することと読み直す時、心の力は皆同じように備わっていることをワーズワスは宣言していると考えられる。従ってデカルトとワーズワスは、理性と直感に対する献辞で、各々の精神的自叙伝を語り出している。

人間であるのなら誰にでも平等に備わり分配されている筈の資質として、デカルトは理性を第一に選び、ワーズワスは直感を尊んだ。しかもデカルトは、学者用語のラテン語を使って書いたのではなく、当時としては稀有な、俗語のフランス語でこの『方法序説』を書いたのだった。知識や権威主義により、生まれながらの良識をまだ曇らされていない一般読者達に期待をかけて、己の精神の歩みを示したのだった。また、ワーズワスも雅語を使わず、一般の人が会話で語るような、普通の言葉を手段として詩を書くことをその信条としており、『序曲』もそうした言葉で書かれたのだった。ワーズワスはデカルトのことを、自分自身のキャロラインという私生児問題の表面化を恐れたのか、表出って口に出すことはしなかったようだが、「精神的自叙伝」を書いたこと、それを語る言葉として日常語を選択したこと、その献辞の内容等からいって、二人は知的冒険者の精神のドラマをまさに共有していたと言えよう。

中世の学者は信仰の啓示と理性とが、決して相反するものではないことを実証しようとした。し



かし、現象と経験からそれらに矛盾が生じ、事実を曇りのない目で見極める、科学的思考、理性主義へと時代は移り、近代へと突入した。そのようにデカルトにより時代が画された。そのデカルトの夢を意識し、それを逆から見ることを示唆し、近代を克える鍵を夢見たのがワーズワスであった。

時代が行き詰まりを見せた時、各々の時代の人間が、己と世界という学問の原点に立ち帰り、自ら闇を導き入れてでも、価値感を——神を——塗り代える、勇気ある作業をする。その知的冒険者であるデカルトを問い直すワーズワス自身も、超時代的側面を持つ者であった。デカルトは理性に、ワーズワスは直感に献辞して精神的自叙伝を語った。これは近代の誕生から根源的に抱えていた問題を示唆している。デカルトは、認識の方法として排除した感覚的経験に対する学問的説明を、解き難い矛盾として残していた。この理性主義が切り落としてきた闇に潜むものの復権が、現在叫ばれている時、デカルトの夢とワーズワスの夢は相い補いつつ、「近代」に対する警告と予言とを、われわれに意義深く語りかけてくるように思われる。

#### 注

- (1) Jane Worthington Smyser, "Wordsworth's Dream of Poetry and Science", *PMLA*, LXXI (1956), 269-75.
- (2) "For these reasons, as soon as my age permitted me to pass from under the control of my instructors, I entirely abandoned the study of letters, and resolved no longer to seek any other science than the knowledge of myself, or of the great book of the world, (Charles W. Eliot, ed., *French and English Philosophers* (New York: P.F. Collier & Son, 1910) p. 10. にある Descartes の "Discourse on Method" Part I 参照。)
- (3) ローマの詩人 Decimus Magnus Ausonius (ca. 310-394) の作品からの言葉。第10巻 Mosella はモーゼル川地域を歌った田園詩で最も有名なもの。
- (4) W. J. B. Owen & Jane Worthington Smyther, ed., *The Prose Works of William Wordsworth* (Oxford: Oxford U.P., 1974) Vol. I, p. 103.
- (5) 拙稿, 「ワーズワス——アーキタイプと習慣的なもの」, 『英米文学研究』(日本女子大学英語英文学会), XXI, (1986), 21-34. において "Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood" に見られる, "habitual being" とワーズワスの詩学とのかかわりを論じた。
- (6) 例えばドイツのロマン主義者シェリングは、ミュンヘンの科学アカデミーの院長であったりした。
- (7) ワーズワスは『序曲』第五巻で "……yea, will I say, / In sober contemplation of the approach / Of such great overthrow, made manifest / By certain evidence……" と156-59行にかけて述べ、「破局」の接近を予感している。
- (8) デカルトは『方法序説』を次のように始めている。"Good Sense is, of all things among men, the most equally distributed; for every one thinks himself so abundantly provided with it, that those even who are the most difficult to satisfy in everything else, do not usually desire a larger measure of this quality than they already possess.……[Good Sense], is by nature equal in all men……"